



No.64 お上（かみ）の仕事と民の力 久留米有馬藩のPFI — 大石堰

「五庄屋」って聞いたことありますか。

今は郷土史に詳しい人しか知らないかもしれませんが、昔は教科書にも出ていた有名な話。常木蓬生の「水神」という小説のモデルとなった、筑後川の改修工事の物語です。

私も小説を読んで初めて知りましたが、コロナ疲れの解消も兼ねて先日、その舞台となった大石堰を訪ねました。

時代は島原の乱後の江戸時代。筑後川の流域ながら高台のため水利が悪く、人力で田畑に水を汲み揚げるしかなかった現うきは市あたりの農民の暮らしぶりから小説は始まります。この農地の生産力を上げようと、重税と飢饉に苦しむ農民のために立ち上がったのが5人の庄屋でした。

今で言う河川改修工事で、公共事業の本質は昔も今も変わりません。つまり事業規模が大きすぎて個人の手には負えないので、工事はお上の仕事。

工事には人足、賄(まかな)い、資材の調達など、莫大な財源が必要。

土木工事がわかる専門技術者が必要でリスクも大きい。

工事に反対する人や減歩で土地が減る人が出る。

事業のおかげで水利が良くなり農業生産が上がって農民が潤うと同時に、年貢が増えて藩の財政も潤う。

庄屋たちは筑後川を堰き止め台地へ水を引く工事を藩に陳情。財政力のない有馬藩は賄いや資材などの財源をすべて5人の庄屋が負担することを条件に公共工事として採択。お上の事業となったことで工事に反対する有力者を黙らせ、設計監理を普請奉行が務め、藩の力で農民に夫役を課して労働力を集めた。五庄屋は身上(しんしょう)を投げ打ち、工事の失敗の責任(磔刑)を背負って農閑期のわずか3ヶ月で堰と用水路を完成させた・・・というお話です。

過酷な農民支配の時代ですから到底、官民連携とかパートナーシップといった生易しいものではありません。しかし民間の資本を使って公共インフラを整備し、民間セクターがリスクを負いながらその果実を回収し、ひいては税収増をもたらすという構図は、今日のPFI(Private Finance Initiative)と全く同じです。

最下層で呻いている百姓の労働力と庄屋の資本力こそ、実は刀を振り回す権威しかもっていないお上にできない事業を実現する力を持っている。お上はなんでも自分でできると思わず、正しく身のほどを知って民の言葉に耳を傾けなければいけない・・・そういう戒めにも思えます。

